学園長だより 第23回

この道の醸すがごとく

愛知淑徳学園理事長・学園長
小林素文

113年余の伝統がある愛知淑徳の同窓会には、大先輩が出席されます。

私が30代の頃には戦前の高等女学校時代の卒業生から「素文ちゃんも立派になったねー」と励ましていただきました。

今でも「まだまだ若いで、頑張りゃーよ」と90歳近い同窓生が古希過ぎの私を元気づけてくれます。

今年の同窓会も様々の世代が集まり、同窓生のバイオリニスト角田育代さんのミニコンサートもあり、盛り上がりました。

＊

先天性の白内障で幼い頃から病院通いをしていた角田さんは、バイオリンとの出会いを、同窓会機関紙『桜が丘』で次のように語っています。

5才の頃病院で知り合った男の子が、先に退院してバイオリンを始めて、楽しそうだなと思って始めました。

その頃は少し見えていたので、母が楽譜を大きく書き直してくれて練習をしていました。

そして「障害があると助けてもらわないといけない場面がある。何か一つもっていると、それを通して友達が出来て助けてもらえる」と言って、母はとてもレッスンに厳しかったです。

でも、苦労とか辞めたいとかはなかったです。

角田さんは盲学校に通っていましたが、4年生になる頃、視力が少し回復したので、愛知淑徳中学を受験すると決め、猛勉強をし、特別に許可された拡大鏡を持ち込み受験し、見事合格をしました。

本校卒業後は武蔵野音楽大学、ザルツブルグ・モーツアテム音楽院で研鑽をつみ、現在はソロバイオリニストとして活躍しています。

今は全盲となりましたが、会場が大きくとも小さくとも、どんなところでも、心を込めて弾く角田さんの音色は、聴く人の心をゆさぶり「魂のバイオリニスト」と呼ばれています。

同窓会での演奏は素晴らしく、感動しました。そして、曲の合間の語りも明るく洒脱で、心地の良いミニコンサートでした。

なかでも、「淑徳を受験しようと思ったのは、淑徳なら受けさせてくれると思ったからです」との語りは、淑徳がそんな雰囲気を醸し出していたのだとうれしくなりました。

＊

〈醸す〉とは、原材料を発酵させ味噌や醤油や酒をつくることですが、雰囲気などを作り出す意味でも使われます。

「この道の醸すがごとく栗葉など光いでしは……」この宮沢賢治が描く、夏のきらめきのように、これからも愛知淑徳が角田さんが思ってくれた雰囲気が醸し出ている学園でありたい、と願っていました。